

New face

深井 稜汰

(東京大学 理学系研究科 地殻化学実験施設)

日本惑星科学会の皆様、はじめまして。深井 稜汰(ふかい りょうた)と申します。隕石をはじめとする宇宙地球物質の同位体比分析・元素存在度分析を専門としています。隕石の化学的情報から、初期太陽系の物質進化を解明することを目標としています(詳しくは今号にて紹介しています[1])。2019年3月に、東京工業大学・地球惑星科学系の横山 哲也(よこやま てつや)教授のもとで学位を取得し、現在は東京大学・地殻化学実験施設の平田 岳史(ひらた たかふみ)教授のもとで研究員をしています。

私は学部2年生の時地球惑星科学科(以下、地惑)に進学しましたが、少なくとも学部生の間に研究者を志したことはなかったと記憶しています。そもそも私は胸を張れるような物理や化学の素養がなく、大学の授業についていくのは大変でした。そんな中で、高校までには本格的に触れたことのなかった銀河・恒星・惑星といった対象に惹かれ、地惑を志望しました。今よりなお未熟であった私は、当時の地惑の先生方に迷惑をかけたかと思いますが、そんな私を受け入れてくれる地惑を大変有難く思いました。ただし、研究者というビジョンは見えておらず、高校教員になるというのが当面の目標でした(2014年に高校教員免許を取得しました)。

学部4年生で研究室に所属してからは、大学生活に充実感を感じはじめました。幅広い知識に欠けるという自覚があった自分ですが、研究はある種「自分の武器で勝負できる」フィールドだと感じました。ペーパーテストに比べ、自分が出した分析結果をプレゼンすることや、論文執筆に向けて議論を深めていく作業が好きでした。研究室所属を通して、ようや
ryota.fukai@gmail.com



く自分なりの勉強法を身につけられたのだと思います。

修士2年頃、修士課程からはじめたテーマ(コンドライト隕石のNd同位体異常)がある程度実を結びはじめた時が、自分の転機だったように思います。自分の出したデータに十分な解釈を見出せていなかった私ですが、ある時ふと作ったグラフを見て「これはイケる」と感じたことを鮮明に覚えています。自身と同一のテーマについて、複数のグループが研究に取り組んでいたのを後に知り、ライバルであったグループがNature誌に論文を出版した時[2]目の前が真っ白になるような(というところですが)感覚がしたのも覚えています。ただ、その時のレースの感覚も今までの大学生活では味わえない興奮でした。その後、横山先生のご指導の甲斐あり、自分達の成果も無事Earth and Planetary Science Letters誌に掲載され一息つきました[3]。

修士課程での充実した経験を経て、博士課程進学以降も継続して研究生活を楽しんできました。一

方で、学会で他分野の研究者の方と議論する機会や、研究テーマを自分で考えるという機会も増えており、徐々に「自分の武器だけでは不十分なのかも」という感覚になってきている頃でした。そんな折、東京都の高校で「地学基礎」の教員として講師をやらぬか、というお誘いを受けました。高校で「地学」を履修したことがなかった私は、基礎的な知識に絶望的に欠けていましたが、持ち前の安請け合い精神で仕事を引き受けました。毎週2回の授業を進めなければならないので、矢継ぎ早に予習を行い、毎回授業時には生徒にフィードバックを要求し、自分の知識をブラッシュアップしながら教員として働きました。この時、学部の授業でわからなかった事はここ(地学の教科書)に書いてあったのか!と大変驚くとともに、基礎に立ち返る重要性を叩き込まれたように思います。

未だにこのスタイルは変わらず、ゼミや学会に追われながらマラソンの水分補給のように足りない知識を補充し、面白い研究を日々探しています。自分の武器を使って惑星科学に活発な議論を引き起こせるよう、日々努力致します。今後ともよろしく願い致します。

参考文献

- [1] 深井, 2020, 遊星人, 29 (1), 14.
- [2] Burkhardt, C. et al., 2016, Nature, 537, 394.
- [3] Fukai, R. and Yokoyama, T., 2017, Earth Planet. Sci. Lett., 474, 206.